

今後の県立高校の在り方検討委員会地域公聴会（江津会場）

日 時 平成28年 9月13日（火）

14:00～16:00

場 所 石央地域地場産業振興センター会議室

会長あいさつ

皆さん、こんにちは。

本日、こうして、今後の県立高校の在り方検討委員会の公聴会を開かせていただきましたところ、ご多用の中、山下市長様を初めとして、4人の意見陳述者の方々にご出席いただくことができました。また、非常にたくさんの傍聴の方々にもお集まりいただくことができました。委員会を代表して、心からお礼を申し上げたいと思います。ありがとうございました。

私は、この委員会の会長を拝命しております島根大学の肥後と申します。

私どもの委員会は、今後の県立高校の在り方検討委員会という名前ですが、その「今後の」の意味は、平成31年度以降の10年間を一つの目途にしております。平成31年度といいますと、もう少し先の話のような気がしますが、実際は、今の中学校1年生が高校に上がる。そして、そこから10年でございますので、現在、幼稚園、保育所にいる4歳の子供、そこまでの方々が、この地域のどういう高校に行かれるのかを考えるための委員会ということになりますし、この地域だけではなくて、今後の島根県全体の県立高校の在り方ということについて検討をさせていただく委員会でございます。

平成31年度からといいますと、ちょうど現在検討されている学習指導要領、新しい小・中・高の学習指導要領が、小学校で全面的にスタートするのが平成32年度ということになります。追って、その後、中学校、高校でも新しい学習指導要領が展開するということになります。もちろん、小学校、中学校、高校の内容ですから、学習内容がそんなに多く変わるということは恐らくないであろうと思います。ただし、今回の学習指導要領では、学習の仕方、学び方、あるいは先生側からいうと教え方というものが大きく変わって、非常に乱暴に申し上げると、子供たち自身が自分から学びに行く、能動的に学びに行く、いわゆるアクティブに学びに行く、そういったことが非常に重要な教育の手法として考えられている。これは非常に新しいというか、画期的なことではないかと思えます。

そのためには、子供たち自身がどういうことに興味を持ち、関心を持ち、自分の個性を

捉え、多様な学びがどのように展開できるか、子供たちの学びの意欲をどのように主体的に高めていくかということが一つの観点になると思います。

2つ目には、今後の学校教育というのは、地域の力と結びつかずにできることではないので、地域の力をお借りしながら進めていく。地域のニーズも踏まえながら、学校の運営をしていくことになりますから、地域と結びついた学校教育をどのように展開していくのかということが一つの大きな柱になると思います。

問題は、そのときに、地域とは何のことかということが非常に大きな問題でございます。これはもちろん市という単位が一つの単位かもしれませんが、もう少し小さな地域もあるし、それから今後、いわゆるグローバルと言われるこの時代に、私たちが教育の中で踏まえなければならない地域とは何かという問題も新しく問いかけられていると思っています。

それから、3つ目には、そういった大きなテーマを掲げながらも、現実、子供の数は音を立てて減っていきます。江津市に限って言えば、現在、200人前後の子供が高校に入っているところが、恐らくこの10年後には160前後になるだろうと推計されています。40人ではないかという言い方もありますが、40というのは1クラス分でございますので、かなり大きな問題であるとも考えることもできます。子供の数が減っていくときに、先ほど申し上げたような、子供一人一人の個性や多様性に合ったような教育がどのくらいの規模の学校ならできるのか、どのようにすればいいのか。そういった具体的な問題が、予算や財政の問題を伴いながらやってくる。その辺をどのように考えていけばいいかということが、恐らく大きなテーマになろうかと思っています。

そういった平成31年度から10年間の島根県の高校教育ということを考えていくわけですが、平成21年度からの10年間、現在のプランの中で、こういう規模、こういう状態になったら高校の在り方、設置そのものについて統廃合を考えましょうという基準に、現在、浜田、江津で合致している高校があることから、今回のこの公聴会という形になったわけでございます。

ただし、県では、基準に合致したから杓子定規に廃止だ、統合だというお話ではありません。そのことは、皆さんのお手元の次第の一番裏側を見ていただきますと、そのことが書いてございます。生徒数の減少による単なる数合わせのような意味合いでの器のつくり方、在り方というものを検討して欲しいということを言っているわけではありません。生徒の数の動向だけではなく、石見地域という少し広く捉えたところで、社会、経済、環境の実情や課題を十分に踏まえて、県立の高校としてどういう教育を提供すべきかというこ

とを、大所高所から議論をしていただきたい。それから、江津市、浜田市エリアにおける県立高校の可能性について、例えば工業教育をどういう方向で考えるか、商業教育をどういう方向で考えるか、そして、普通科教育の核をどのように形成していくべきかといったような観点から考えていただきたいということになっています。

私ども委員の数は、全員で12名でございます。先ほど申し上げたように、これは、江津、浜田の問題を検討するための委員会ではそもそもありません。全体の県立高校の在り方を検討するということで選ばれた12名でございますので、必ずしもこの地域の方が多く含まれているわけではありません。実際のところは、4名の委員がこの地域、西部の出身ということになるかと思えます。

そういうところから、下のほうに書いてございますように、検討委員会の委員には、石見地域の在住者が少ないことから、そういった今後の検討を進めるに当たって、地元の意見を十分にお聞きして、その上で議論をしていきたいということから、今日の公聴会になったものでございます。2時間という大変限られた時間でございますけれども、皆様のご意見を広く聞かせていただきまして、少し議論もさせていただきながら、私どもの今後の検討の一つの大切な柱にさせていただきたいということでございます。

忌憚のないところをお聞かせいただくようお願い申し上げます、最初のご挨拶にさせていただきます。どうぞよろしくお願ひいたします。

江津市要請書の説明

説明者 江津市長 山下修氏

皆さん、こんにちは。江津市長の山下です。

本日は、江津エリアの県立高校のこれからの方向性や可能性について意見を述べる地域公聴会を開催され、委員の皆様方に直接お話しする機会をつくっていただき、まことにありがとうございました。時間の都合もありますので、早速、江津市の要請書について説明をしたいと思います。

これは、平成27年6月5日に、私と当時の藤田議長と連名で、さきの藤原教育長へ提出したもので、直接、教育庁へ出向き、お渡しいたしました。要請書提出までの経緯といたしましては、江津高校、江津工業高校の入学者数が、少子化の影響などから定員を下回る状況が続いており、こうした状況を踏まえ、平成27年1月に江津市県立高校あり方検討会を設置いたしました。そして、15人の委員の皆さんに、市内の高校生にとって望ましい県

立高校の在り方、編成について検討をお願いいたしました。

この検討会では、市内2校の県立高校が置かれている現状把握からスタートし、高校を選ぶ重要なポイント、高校の情報発信のほか、入学定員及び教員数、さらには、県の再編成基本計画など、多様な視点で4回の協議を重ね、報告書にまとめていただきました。そして、平成27年3月27日に、松田会長から報告書の提出を受け、その報告書に基づいて作成したのが、委員の皆様のお手元にございます、県に対する要請書です。

現在の市内中学校の生徒数は、各学年とも200人前後で、小学校の児童数は各学年190人前後、多少でこぼこはありますが、減少傾向にあります。また、ここ数年の市内の出生数は、これも年によって異なりますものの、年間170人から160人程度で推移しています。

一方、教員の配置や部活動などの教育環境を保つためには、学校の一定規模は必要であると言われていています。また、高校生活の中で個性を伸ばす機会を広げる必要がありますし、学力の底上げ、あるいは進路選択の多様性など、学校の規模と切っても切り離せない関係にある課題も多いと感じています。

検討会では、こういった状況を正面から見据え、市内の高校生にとって望ましい県立高校の在り方について検討をしていただきました。私もその報告書を尊重し、このたびの要請書を作成いたしました。

それでは、具体的な内容について説明をいたします。

まず、1番目の新たな施策による高校の魅力化・活力化についてです。検討会の初回で、県教委から現状の説明をしていただき、その中で、生徒数が減っており、このままでは近い将来、両校とも県立高等学校再編成基本計画の統廃合基準に該当する可能性があることがわかりました。このような中でも、現在、江津高校は充実した英語教育施設を所有する江津市唯一の普通科の県立高校であり、特色あるキャリア教育や少人数指導によって教育効果を上げつつあります。

また、江津工業高校は、江津市を中心とした石見地域一円から生徒が志願し、卒業生も各方面で活躍している歴史ある高校です。キャリア教育を充実させ、スペシャリストの養成により、就職内定率も長年100%と、その実績を上げています。

これら両校の特色ある取り組みをさらに充実させるため、県外4名枠を撤廃しての積極的な県外生徒の受け入れや高校魅力化事業の拡大など、新たな施策によって、魅力と活力ある高校として着実な歩みができるよう、県教育委員会へ要請されたいという検討委員会の報告がこの要請文の基礎となっています。

実際にこの要請に対応していただき、平成28年度入試から県外4名枠が撤廃をされています。加えて、スポーツ特別選抜の出願資格の県内限定を撤廃するなど、県外募集の拡大もしていただきました。具体的には、江津高校の男子水球や、江津工業の男子ボートが指定競技となっています。

それと同時に、検討会からは、江津市に対しても、高校魅力化コーディネーターを設置するなど、県教委の取り組みを支援することを検討されたいといった意見がございました。このため、市としては、これまで行っている両校への支援内容を見直し、平成28年度からは、県外生徒募集に補助金が見えるようにその要綱を改正しています。また、直接的には関係はありませんが、保護者負担軽減の観点から、下校時の桜江町方面へのスクールバス運行についても、平成24年度以降、継続して実施しています。

次に、2の情報発信についてです。これは、各高校の実態が十分に地域に情報発信されていない、何をやっているのか見えないと。また、今は生徒も保護者もインターネットによって情報を取得しているので、ホームページをより充実させるなど、それぞれの高校の魅力の情報発信の方法について見直しを行い、新たな情報発信の手法に取り組まれるよう要請されたいという報告に基づき要請したものであります。

次に、3の学級数についてです。学級数の検討とありますが、学級減に当たっては、魅力化や活性化、情報発信など、やるべき対策を行った上で、その実績や結果を見てから判断していただきたいというのが本意です。しかしながら、英語科に引き続き、平成28年度から江津工業高校の学級数が1学級減となり、残念な結果となっています。県教委としては、機が熟したと判断されたということでしょうが、私どもは県教委から直接聞いておらず、極めて遺憾に思っております。

次に、4番目の高校再編成基本計画の個別計画についてです。現在のところ、江津工業高校と江津高校に関係する統廃合計画は示されておられません。そうならないことを願っておりますが、仮に統廃合計画を策定される場合には、しっかりと協議をされ、かつ地元住民が納得できるような計画とされるよう要請したものであります。

なお、4回にわたる検討会ではさまざまな意見をいただきました。その主な内容を申し上げますと、「さらに生徒の能力を伸ばし、可能性を広げるためには、学力の向上、部活動などの活性化が不可欠であり、そのためには、生徒数、教員数の適正な学校規模が必要となってくる。今後、生徒数減少が進む中、その適正規模を確保し、市内生徒が自宅から通学できる場所に幅広い教育科目、教育環境を確保するためには、江津市内の2校の県立

高校の統廃合は避けて通れないことは理解する」として、検討会の報告書に意見をまとめられています。

また、仮に2校が統合する場合、適正規模、学力の向上、部活の活性化、進路選択の多様性など、統合メリットが数多くある一方で、専門学科系の江津工業高校と普通科系の江津高校が一つになると、それぞれの個性が薄まり、魅力、活力ともに減退する懸念がある。

また、県内にこのように性格の異なる2校の統合例がないことも不安要素の一つであるとの意見もいただいています。

一方、地域の高校の衰退は、地域経済へも大きな影響を及ぼすと考えられるため、統合によるデメリットの発生はどうしても避けなければならないとの懸念や不安についても、具体的に報告書に記載していただいています。

こうしたことなどから、今後、個別具体の計画を策定されるに当たっては、今、申し上げましたような懸念、不安のある問題について、慎重に分析、検討され、地域と十分な意見交換をしながら、その解決の方法を示した上で計画を策定されるよう、また、計画策定の折には、教育効果が最大の個別具体の計画となるよう県教育委員会へ要請したものです。

ここでいう教育効果が最大の個別具体の計画とは、教員配置数が十分に確保されることなどを念頭に置いたものです。そのほか、検討会からは、今回の県立高校のあり方検討会で検討された内容が江津市民で共有できるようパブリックコメントを求めるなど、その周知方法等について検討されたいとございました。

江津市としては、その後、平成27年の広報5月号及び江津市ホームページにあり方検討会の記事を掲載し、意見募集をいたしました。その結果、27件、22名の方から意見をいただきました。1都2府7県から意見をいただいております。そのうち江津市内からは2件、2人となっています。内容は、生徒の目線でメリットの多い方向で考えるべきだといった意見や、江津工業高校の存続を訴える意見、また、市内2校のさらなる自助努力や中学校の進路指導の強化を求める意見などをいただいています。特に江津工業高校の卒業生の皆さんから、工業高校存続の意見が数多く届いています。このほかにも、平成27年6月4日に、都野津町の江津高校存続署名運動の発起人の皆さんから、1,740人の署名簿が提出されました。その内容は、学校を存続させ、校舎が今後も利用されることを強く要望しますという趣旨のものです。検討会の報告書には、このほかにも、再編成基本計画について、策定スタートから既に6年が経過し、過疎化と少子化が一層進む中、最近の国、県の地方創生、定住促進といった大きな流れに逆行しないよう、柔軟に見直しをしていただきたいといっ

た意見も添えてありました。まさに本日の委員会に対しての意見とも思われます。

私自身の意見ですが、できることであれば2校の存続を願うものでありますが、決してそれ以外は受け入れられないというものではありません。先ほど、肥後会長さんの挨拶と重複するかもわかりませんが、何よりも大切なことは、江津の子供たちの可能性を大きく広げることのできる県立高校であるべきと思っています。それと同時に、今、喫緊の課題である地方創生といった観点に立って進めるべき大きな問題の一つとも考えています。

いずれにしても、県立高校再編成基本計画が策定されたのは平成21年度です。その後、社会を取り巻く環境は大きく変化しています。中山間地域では、人口減少、高齢化が急速に進行し、その実情も大きく変わっています。これまで県立高校の在り方については、どちらかという生徒数の問題に基づく再編に重きが置かれがちですが、私は、求められている学校教育の在り方や教育効果なども勘案して検討していくことが必要だと考えます。

例えば、高校教育に求められる役割は、現在、学習指導要領改訂が進む中で議論されています。具体的には、今、検討されている新しい学習指導要領では、子供たちが変化の激しい社会を生きるために必要な力の育成を目指していくこと、社会との連携、協働を重視しながら、学校の特色づくりを図っていくこと、現実の社会とのかかわりの中で豊かな学びを実現していくことなどが求められています。また、その推進に当たっては、学校と地域社会との教育課程の共有、すなわち社会に開かれた教育課程の実現についても提言がなされています。

こうしたことに加え、ふるさとキャリア教育の充実や高等学校における専門的な教育の充実を図る観点から、地域企業の協力、産業界とのかかわりも、これまで以上に重要になるのではないのでしょうか。また、地域住民、企業にとって、地域にある高校の存在は極めて大きく、教育への参画意識を高める要因の一つともなっています。社会に開かれた学校での学びは、子供たち自身の生き方や地域貢献につながっていくとともに、地域全体で子供の成長を支える体制や、かかわりの中で生まれるきずなが地域活性化の基盤となり、好循環をもたらすことも期待できます。

一方で、小規模校を全て残すとなると、教員定数であるとか、あるいは県立学校管理費の問題など、県の財政運営上の問題があることも重々承知をしています。

どうか委員の皆様には、今、私が申し上げましたことなどを総合的に勘案され、大所高所に立って新たな再編成基本計画を策定していただければ幸いに思います。くれぐれも拙速に陥ることのないようによろしくお願いを申し上げておきたいと思っております。

そして、その取っかかりが江津、浜田エリアになると思います。順次、県内に広がっていかれることとなりますが、きょうは、これから江津の4人の皆様の意見陳述がございます。さまざまな意見が述べられることと思いますが、どうぞ委員の皆様には、真摯に耳を傾けていただきますようお願いを申し上げ、少し長くなりましたが、私の説明を終わります。

<質疑>

○委員

今、高校の魅力化・活性化について、江津高校、江津工業についてもそういう取り組みをして欲しいという話があったのですが、検討委員会の中で、江津高校はこんなふうにしたらもっと魅力的な学校になるのではないかとか、江津工業については、こういうふうにしたらもっと活性化するのではないかという具体案が出ていたらお教えいただきたいと思っています。

○山下市長

具体的なものはございませんが、いろいろな意見、あるいはいただいた提言書を斟酌しますと、地域の子供たちが本当に行きたいと思えるような学校にしてもらいたい。それを称して魅力ある学校ということなのでしょうけども。今の子供たちはいろいろなことを考えています。こういうものができれば、行きたいという環境になってきていますので、皆さん方の意見を要約するとそういう意味なのだろうと思います。

1つの例で言いますと、例えば地域貢献学科みたいなものが一つ考えられるかもしれません。これは、中高一貫教育をしてくださいとかいうそういう話ではなく、まずはこの会で検討をしていただいた上で、私どもの意見も述べながら、よりよい方向に持っていければいいと思っております。

○委員

先ほど市長の話の中で、県外4名枠撤廃と県外募集の拡大というお話がありました。そうしたときに、子供の生活拠点、今、江津高校には寮がありませんが、その辺についてはどのようにお考えですか。

○山下市長

基本的に中山間地域の県立高校には寮がございます。例えば島根中央高校もそうです。それから、松江北高にも寮があります。私は、いずれはそういったものを設けていく必要があるのではないかと考えているのですが、現在、江津工業高校の寮が

ございます。相当老朽化をしていますが、こういったものを改修して、外から来る人たちに提供していくというような方法もあるのではないかと考えています。外から人を呼び込んでこようということになると、その前提には寮、一般で下宿をするという方法もあるのですが、保護者負担が極めて大きいものがございますので、やはり寮というのは、私は必要になるのではないかと、県はあまり寮をつくりたがられませんが、私は必要だと認識しています。

意見陳述

1 トップ金属工業株式会社 常務取締役 林田栄三氏

トップ金属工業の林田でございます。

当社は、島根県並びに江津市から誘致企業として認定を受け、平成6年から江津工業団地で自動車業界向けの量産器具であります金型を製造販売している会社でございます。私は、大阪から平成6年にIターンでやってまいりました。江津高校のOB、江津工業のOBがおられますが、私はどちらのOBでもございません。本日は、各方面から意見陳述者がお見えですが、私の立場は地元企業の工場管理者として、地域活性化の重要課題でもある雇用創出の観点から意見を述べることだと考えて、ここにやってまいりました。

したがって、教育についての意見も、国内主要産業や地元企業が求める専門性の高い既存教育機関の存続と、それら教育機関のさらなる充実と活用を図ることの必要性を委員の皆さんにお伝えしたいと思います。陳述内容としまして、3つお伝えしたい。

1つ目が、統合路線を前提とした検討にならないよう、個人的な思いを希望として掲げたいと思います。江津高校と江津工業が統合になるというような話が出ておまして、また、浜田では、浜田高校と浜田商業が統合される、行政区画を前提とした検討にならないように希望したいというのが、地域に住んでいる住民の一人としてお伝えしたいことです。

総合教育という形で、普通科高校と産業教育科の高校が統合されることは、指導要領等、難しい面もあろうかと思いますが、検討結果の落としどころとしては適当な方法だろうとも感じています。本市内でも両校単独でこのままの状態を残すべきという声も聞きますし、県立2校をいつかは統合せざるを得ない、やむなしという意見も多く伺っています。しかし、私の個人的な思いとしては、統合は両校が持っている特色を薄める結果となって、両方ともだめな状態になるのではないかとこのように考えております。市内県立高校の統合は避けるべきというのが私の意見でございます。産業教育推進の体制を残し、かつ少子高

齢化に適応した魅力化を掲げるためには、産業教育高校同士の統合や普通科高校同士の統合を検討されるべきでないでしょうか。進学を志す者への教育、就職を意識された方々への教育、古い形と言われるかもしれませんが、まだまだ島根県の石見地域では生かせるのではないかと感じています。ぜひとも委員の皆様には、本市及び地方活性化につながる教育の在り方を検討していただき、地域が育てた人材を地域で活躍させて、地域の暮らしが豊かになる方法を見出していただきたいと思いますところでは。

2つ目の内容ですが、人口減少と少子化の現状を踏まえて、市内既存の高校数が適当かどうかという判断基準ですね。平成27年1月に、市内県立2校の定員割れ状況に歯どめがかからない事態を踏まえて、江津市が県立2校のあり方を検討する委員会を立ち上げられました。地域の子供にとってよい教育体制を確立するための検討が重ねられたと伺っています。平成27年5月には、江津市の広報に「望ましい県立高校の在り方について、あなたの意見をお寄せください」とのページがございました。その際に、市民の一人として提出した意見がこの陳述の中身でございます。その際の主要部分だけをお伝えいたします。

県行政費用で教育関連予算は最も多くて、子供の数が減少傾向にある今日でも、既存学校の数を維持するためには相当な財源が必要になります。また、それらの学校は、経年劣化の修復や魅力化のための追加経費も必要な状況であります。本市の場合、今後の中学卒業生が市内高校、県立で2校、私立で1校存在しまして、その入学定員数よりも少ない中学生の人数という状況から、県立高校を現状のまま2校残すことは、財政面的にも教育環境の面でも適当ではないと考え、早期に江津高校の廃校を求めるという意見を提出いたしました。この意見を提出した時点では、江津高校、江津工業高校とも3学級120名の定員でありましたが、この春より両校とも2学級80名定員に改定され、これにより統廃合検討対象校となったのですが、経費削減だけを考えての、子供たちの教育を受ける機会に不利益が生じるということは避けるべきです。学校数を減らすことで、教育を受ける子供たちがよりよい環境で学べるようにすべきというのが私の意見です。現在、2校存続する県立高校を1校にして、学校数を減らすことで得られる効果を考えていただき、本市の総合戦略にかなう人材育成が可能な状況をつくるべきと考えます。

3つ目ですが、産業教育高校の必要性をお話しさせていただきます。本市の人口減少、特に若年人口の減少については緊急対応すべき課題で、江津市の将来を考える上で最重要課題と考えます。2014年に示された江津市総合戦略でも、まち・ひと・しごとの創生が掲げられ、戦略どおりに現在も活発な江津工業団地への企業誘致や、既存の地元企業の設備

投資が推進されています。これらの工場進出や生産規模拡大の背景には、当社が江津市に工場建設計画を決定したときと同様、江津工業高校の存在そのものが非常に意味があるものと考えます。工業系企業にとって、通勤エリアに工業高校が存在する事実は進出決定に影響すると考えます。雇用確保が心配される場所には、工場を建設する計画は成立しがたいと判断しますが、いかがでしょうか。

当社が、基礎教育を修得した若者を採用できるという点で江津市への工場建設を決めた経緯を考えると、今後の企業誘致を推進される上での宣伝文句として、島根県、江津市ともに工業高校が重要な地元資産と認識されるべきと思います。進学先を検討される中学生や保護者の皆様に、江津工業高校卒業生の活躍状況を知っていただきたいと感じています。また、あわせて、江津市にある職業能力開発短大、ポリテクカレッジの存在も知っていただきたいです。もし、江津工業高校とポリテクカレッジの連携ができれば、地域の教育資源を活用したものづくり産業への若年従事者創出地域となり、ひいては、人材を欲する企業の誘致も実現する可能性を秘めているのではないのでしょうか。県立の産業高校と厚労省管轄の職業能力開発短大が連携することで、企業が求める即戦力若手人材の育成が可能になり、地元企業が受け皿となり得る仕組みづくりを絡めることで、地域を支える若者の定住促進に寄与すると考えます。

普通科高校やはやりの専門学校をつくることより、産業教育高校やポリテクカレッジのような職業能力に特化した教育施設、教育体制をつくることのほうが困難だと考えています。地域に存在する2つの貴重な教育施設と指導体制を連携させる形で有効活用する方法を見出せば、江津市でしかできない若年技術者創出地域となれるのではないのでしょうか。県東部の松江高専と競うべく、県西部の江津工業とポリテクカレッジの連携教育機関という形で高度ものづくり人材創出体制を構築することは、島根県西部の生産人口増加にも寄与すると考えます。

今後の県立高校の在り方をまとめますと、産業高校をその特色を高めて存続させることで、地域経済を支える企業誘致と雇用を創出できると考えます。都会部で産業教育衰退の実態が進んでいますが、それとこの地域は異なるという点を理解していただき、地方の教育体制がどうあるべきかを教育行政にかかわる方々や県議会議員の皆様に検討していただき、島根県西部地域の活性化につながる方向決定をなされることを望みます。国の職業能力開発短大という既存施設と工業高校との連携方法を見出し活用することで、就職志望の若者や保護者の方々に、地域の豊富な教育機関が利用可能なこの地域の有利さを開示する

ことが重要だと考えています。ポリテクカレッジが江津市に存在することで、江津工業高校の存在意義、魅力化を高めることは可能だと考えています。

一方、進学希望者向けの県立高校としては、江津市民は浜田高校への進学エリア、学区として、江津高校は浜田高校と統合するという形は無理なことではないのではないのでしょうか。その際、浜田商業については、江津工業高校と産業教育同士の統合という形が最後の落としどころではないかと提言させていただきます。

以上で私の意見とさせていただきますが、検討委員の皆様にも、ぜひとも江津工業団地の現状と、当社で働く地元の若者が活躍する姿を、また別の機会をつくって見ていただくことができれば幸いです。

もう一言、私は、平成6年に大阪から島根県へ飛ばされた格好でIターンなのですが、家族5人でやってまいりました。長女は江津高校でお世話になり、長男は江津工業でお世話になり、次男は浜田高校でお世話になりました。通える範囲の県立3校に子供たち3人がお世話になったということだけお伝えします。

<質疑>

○肥後会長

委員の皆様からの質問をお受けするのですが、会長として一言、誤解を解いておきたいと思います。私どもの委員会、第1回から今日までの間に、江津高校と江津工業高校を統合するという案が出たことは一度もありません。それから、浜田商業と浜田高校を統合するという案が出たことも一度もありません。そのことについては、議事録をご確認いただければと思います。新聞記事にそのような内容のことが出たことは存じ上げておりますけれども、この委員会の中でそういう話が出たことは一度もないということは、確認をひとつさせていただきます。

○委員

御社での採用について、地元からどれぐらいしておられるかとか、江津工業の卒業生が実際どれぐらいいて、どう活躍しているかというお話があれば、ぜひお聞きしたいと思いました。

○林田氏

当社60名でございまして、地元の若手社員が55名、私以下、大阪から来ている者も5名ほどおります。55名のうち、27名が江津工業高校出身、そのうちの7名、8名がポリテク

へ進学した後に入ってくれています。そういう意味では、工業高校の卒業生に支えられている企業でございます。浜田高校、大田高校、邇摩高校、江津高校、江の川高校、そういったところのOBもおりまして、55名は43歳を筆頭に18歳までのバランスで、頑張ってくれています。

2 江津市図書館協議会 委員 大西佐和子氏

大西佐和子といいます。子供が19歳と中3と中1でして、とても今、リアルタイムな話で、保護者の方とかいろいろな方にお話を伺いながらご意見を聞いてきました。その中で一番多かった意見は、なぜ県立は2校受けられないのかといった意見でした。こっちもあっちも受けたい、チャレンジしたい。チャレンジしてちょっと高みを狙いたいけれども、県立は1校しか受けられないので、私立に行くという選択しか残っていないのはなぜだろうかというような話が一番多かったです。それから、江津高校の人気が出るためには、給食をつくれればいいのではないかというようなおもしろい意見もありました。そういったいろいろなお話を聞く中で私が感じたことをお話しできればと思っています。

うちの息子が中3でして、いろいろなところにオープンスクールに行っています。今の時期しか行けないので、県外の高校も見ていくといいよと私がけしかけて、いろいろなところへ見に行く機会をつくっています。その中で、息子は、ここの学校は部活はおもしろかったけれど、授業がつまらなかったとか、授業はおもしろかったけれど、部活がもう一つだったというようないろいろ感想を持って帰ってくるのですが、一番は、その生徒の顔が輝いていたかということがとても引かれるようでして、そういうアプローチの仕方はこの地域にはないと感じています。江津高校の子供の表情がどうか、工業の子供の表情がどうかという視点はないと思っていました。

やはり子供を呼び込むのは子供ということで、高校生が受験に向かったの勉強だけではなく、就職に向かったの勉強だけではなく、こんなに楽しい地域でこんなに楽しいことをしていると感じながら学生生活を送っていることを外にアピールすることで、もっと外部からの入学生が呼べるのではないかと感じています。ひいては、高校生を育てることにもなりますし、学力を上げることにもつながっていくと思いますので、大人だけが考えて、学校をどうにかしようと思うのではなく、もう少し中学生、高校生の力を使った高校アピールを、今後は手がけていく必要があるのではないかと感じています。

私は、今、ICT支援の仕事も行っておりまして、ある町村では、4年生から中学校3

年生までに1人1台iPadがありまして、それで授業を行っているのですが、その支援も行っております。「わかった」というところから、「もっと知りたい」と思わせる授業をするためにはどうしたらいいのか、小学校でも中学校でも苦勞されていることがわかりました。すごく勉強して、日々研究しておられることがとてもよくわかりました。

そこで、今の場にそぐうかわかりませんが、私が個人的にチャレンジしてみていただきたいと思うことは、反転授業でして、家で動画を見たり勉強したりしてくる。そして、学校でそれを確認して、わからないところをアクティブラーニングみたいに教え合うというような授業が、子供が受け身ではなく、能動的に積極的に学びを進めていく一つのものではないかと思っています。先生のやる気を育てるためのコーチングというような役割を、次世代からはそういう勉強をされていく必要もあるのではないかと感じています。

人口が減っていきますと、一人一人違うが仕事をするようになっていく可能性が増えます。同じ仕事をする人が減っていく、そういう仕事はロボットがしていくということで、一人一人担う役が多様化してきます。その中で、学校で協調性を主に置いた教育のみですと、個性を伸ばしたり、発想にあふれて、ほかのやる気のある人と話をして進めながら、反対の人を説得して実現していく力をつけたりするのは難しいのではないかと、学校現場の実情も見ながら感じています。

やはり中学校を卒業して、高校から外に出るのと、高校まで地元にいるのとでは、愛着心が全く違うと思いますので、私はぜひ、高校は地元に残って欲しいと思っています。将来のためにも、高校は地元に行ってくれればと思っています。息子にも、見学は県外にどんどん出ていいと言っているのですが、受けるのは地元にして欲しいという願いを言っています。

先ほどの林田さんのご意見と一緒に、目的を絞るとか特化するというようなことは賛成です。ただ、学校をどうこうするというのではなく、もう少し、反転授業とか、配信授業とか、その子に合った授業をしていけば、いろんな可能性が考えられるのではないかと思います。高校を、例えば別にしても、部活で集まるということもできると思います。県外の高校にオープンスクールに行ったときに、サッカー部のグラウンドまで自転車で毎日15分通っている高校もありましたので、両者が寄って部活をするということもできるのかなと思ったりしました。

それから、息子たち今の中学校3年生が、職場体験を行うのです。建築業にうちの息子が行ったところ、建築業者の方が息子の手を握って、頼む、医者になって地域医療を支

えてくれと言われたらしく、それで息子はちょっと勉強する気になりました。その地域の人が、今、どういうことに困っていて、どういう期待を自分に寄せてくれているのか、自分たちのバックグラウンドは全くわからないまま言ってくれる、その新鮮さがとてもいいようです。学校の先生とか家から、その子の勉強をしない様子をずっと見ている中での声かけと、全く知らない人から地域の期待を寄せられているのでは全然違うのだと思ひまして、地域の人とのかかわりはいいと思ひました。

以前から、地域の中で市内留学をしたらいいと思ひていましたが、また何かの機会があったら声をかけてください。子供たちが市内のおじいちゃん、おばあちゃんのところへ行くといいと思ひました。

あと最後に、魅力ある高校づくりなのですが、高校のコーディネーターが、今、江津高校にはいらっしゃらないですよね。昨日、一昨日もU・Iターンの関係で広島に行ってきたのですが、そのときにも江津高校の教頭先生がいらして、いろいろ来られた方に説明をされていたのですが、経営とか運営とか、生徒集めのためのものは、先生方に課せるのではなく、コーディネーターとか、そういう外部の方がおられるといいと思ひました。以上です。ありがとうございました。

<質疑>

○肥後会長

反転授業の話が出ましたが、反転授業は、基本的には大学で推進されつつあるものの一つで、自学自習の力を非常に強く必要とするものですが、そのあたりはいかがですか。

○大西氏

やはりそういう力を中学校の時に付けておくといいと思ひます。中学校までに身につけていくということは、小学校までにいろんな体験をして、成功体験も失敗体験も自分で学び取る、楽しさを持っていくというのがいいと思ひています。

3 江津青年会議所 副理事長 砂田秀人氏

皆様、砂田と申します。よろしくお願ひします。

きょうは、江津青年会議所という立場で来ています。江津青年会議所は67名か68名ぐらいの組織で、毎月9,800円の会費を払いながら、自分の時間とお金を使って地域の活動をしている、20歳から40歳までの男性、女性どなたでも入れる団体でございます。私は、20

04年から長々と所属しています。会社では、ホームページとか広告をつくる仕事を江の川のほとりでやっています。江津市だけではなく、邑南町とかにもよく行ってまして、昨日も矢上高校の魅力化で、特産品づくりの事業などにお邪魔したりしています。

もう一つの顔は、小学校4年、2年、2年と女の子がいまして、高角小学校のPTA会長も務めているという3つの顔で、お話をさせていただこうと思っています。僕は、大阪とかで働いていたのですが、帰ってきたのは、自分の母親とか父親がずっと墓参りをする人間で、墓を誰かが見ないといけないと思ったからです。ですので、高校があるから帰ってきたとかではなく、ここで生きる親の姿勢を見て帰ってきています。

私が思うに、人口減少についてですが、出生率は高い町で、例えば、私は3人産んでいるから人口を増やしているのです、プラス1。問題は、子供が1人しか残らなければ、マイナスになるわけで、最低でも2人残さないこの町に僕は恩返しができないと思っています。では、その2人を残すために、ここにどういう学校があるべきかと考えないと、物事は始まらない。

私の同級生は、まだ江津高校に180人位いました。小学校も80人で2クラスの時代だったのですが、今、半分ぐらいまで減っています。私のころ、浜高へ行くのは、150人位の江中の生徒の中で、20人位の選ばれた人でした。江津高校でいいやとか、まだ働くのは嫌だとかいうことで、江津高校に行けていたという状態だったのです。働きたくもなければ、進学をしたいわけでもなければ、ちょっとした猶予期間を持って、大学に行ったらいいのではないかという気持ちで選ぶ。それが許されていた時代だと思うし、それだけの生徒数がいたから、それが成り立っていたと思うのです。

企業も一緒に、人口のグラフを見ていくと緩やかに減っていく、これはどこの町もそうなのです。資料をもらいましたが、県内の高校、軒並み減ですから、生まれる子供は減っているのです、僕らの企業も減るのです。ただ、企業も損益分岐点を下がった段階で、緩やかに死ぬのではなく一気に死にます。売り上げが立たない、利益が出ない、給料が払えない、そうしたらもう終わり、銀行からさようなら。町の人口減は緩やかでも、僕らの産業というのは一気に死ぬのです。学校も一緒に、ある程度の数までは維持するかもしれないけれど、それを超えたら途端にばさりと切られるというのが現実だと思っています。だから、緩やかに減っていく云々ではなく、私たちがいたときの半分、多分ここで聞かれている方のときの4分の1ぐらいまで減っている状態で、維持をどうしようかと言っても難しい。ちょっと変えていかないと維持はできないだろうと。僕らの会社でもそうだが、売り

上げを前年より同じか上げなければ、減るばかりなので、その辺を考えていかなければいけないだろうと思っています。

では、魅力化をどうするかですが、先ほどお話があったように、工業団地は、希望より多く増えている状態です。ただ、気になる数値があって、このまちで働きたいといった子供たちが、今、どこで働いているかといったら、2割しか働いていなくて、あとはみんな市外に出ていっているのです。この8割がどうにかこっちで働いてくれると、産業人口は増えるので、そういった教育をして欲しいです。工業高校で技術を学ぶのも当然いいのだけれども、このまちできちんと恩返しをするような思考を持てる。やはり地域がいいなと思っていただけるような仕組みをどうやって授業の中に取り込んでもらえるかというのが、もっとしなければいけないことだろうと、工業高校に対して思っています。

実際、例えば美容師なども、専門学校に行っただけでは使いものならなくて、現場に出て3年間髪の毛を切らせてもらえないぐらい、ずっと練習しないと役に立たない。それは、フリス旋盤なども一緒に、企業によってやり方もまちまちなので、ある程度の基礎以上のところまでやられると、逆に変な癖がついて困る。やはりある程度のところまでやって、あとは、地元の企業に行って早目に研修とかを受けつつ、道が選べるような学校であれば、よりゴールに近いだろうと思っています。

私自身が子供のころの高校生の価値観でいうと、江津高校に行っていたとき、補習が夏休みにあったのですが、出る気がなくて、河合塾などの合宿に広島まで行って受けさせてもらいました。テストの成績など担任の先生と相談して、この時間を使ってあっちに行かせてくれと言って行ってきました。当時、こんなところで10番だとか、何の役にも立たないと思って帰ってきて、同級生同士で勉強し合ってお前、まだテレビ見ているのかと、成績の良い人に言われて、悔しい思いをしたりしていました。それはそれで楽しかったのですが、そのような競争原理が働いているのは、当然人数が多かったからで、働く人間もいれば、おもしろく学校生活を送りたい人もいれば、もっと伸びたいという人もいたので、そこに僕は行けたのだらうと思います。これが1クラス、2クラスになってくると、そういった競争も多分できなくなると思う。

嫌いな人と別れられるというのはとってもありがたかった。そして3年後とか2年後会ったときに、許せるようになったのが、人間の成長で、それが小さい集団になるとなかなかしにくいと思う。ラインに入って自分のテリトリーを守っていくことを大事にする仕事にはいいかもしれないですが、チームワークとか交渉術を持ってやっていく仕事になると

厳しいという不安を持っています。

江津高校は必要だと思っています。なぜならば、僕の子供が、この場所にずっといてくれるためには必要。ただ、問題は人数が減ってくると効果をもたらさなくなるので、その人数をどんどん増やしてもらおう。ただ、世の中全部マイナスですから、結局、人の奪い合いなので、何が要るかという、U・Iターンに早いときから取り組んだ県だったので効果が出たのと一緒に、周りが鈍足で動いているときに、ずばずばと新しいことをこのまちからやっていってもらおうことだろうと思います。獲得した、その子供たちが働ける場があれば、その子供が生まれて、またその学校がよければ、循環していこうと思います。

その前に、まずは、ここの学校を存続させるために人をどう呼んでくるか、魅力化するか。私が子供のころは、大学を出るまでモラトリアムだったのですが、今の子供は、どう働くのかが中学校で決まっていなくて、もう仕事がないような時代、私も心配しているのです。ロボットに単純作業が全部奪われたときに、どうなるのだろうと。今、3Dプリンターですごくきれいな機械ができて、これもまずいといった感じ。自分は作業をする人間でどんな仕事でもいいというのであれば構わないが、こういったことがやりたいといったときに、早くその場に連れていきたい。例えば、ことし、江津市の小学校が教育委員会の主催でやっているJ P X起業体験プログラム。J P X起業体験プログラムとは日本取引所から講師に来てもらって、株式会社を立ち上げ、子供たちが、自分で利益を稼ぐ練習をするという授業。子供のうちからお金をどう稼ぐかということに意識を持ってもらいたい。今は3年もつ企業でさえ少ない。転職を5、6回位するような気持ちでいけない。では、5、6回の転職でも耐えられる人間をつくらなければいけないと、このまちは成り立たない。

あと5年で生産人口が6,000人位減るような話を聞いた。この町の製造業、建設業がどうなるのかということも含めて、ものすごく危機感を抱いている。10年、20年ではなく、ほんの5年先が見えていないので、働くなら働くという選択肢を早目に持ってもらおうと、僕ら企業も多分楽だし、学校側もゴールが見えているので、その子の道筋をきちんと用意してあげることができると思っている。勉強は勉強できちんと用意して欲しい。勉強の用意の仕方というのは、先ほどのICTもありますが、大人に対しては、今はパソコンを用意しておいて、自分で学びたいものを学ばせて、3カ月後、試験を受けさせるといったやり方もある。子供でいうと、2、3年位前から、チャレンジなどもタブレットが来て、赤ペン先生がタブレットで問題を解いたらすぐ丸つけをしてくれて、間違えたら答えまで出て

てくるようなやり方がある。そのくらいマニュアル的なことは機械がやってくれるので、学校の先生の在り方とか、指導の在り方、今までとは違う、付加価値のあるところに持っていけないと、必要性がなくなる。僕はパソコンの講師の仕事をしばらくやっていたが、今は、それはほとんど少なくなりました。さっき言ったように機械が代替してしまうので、もう要らないのです。10年前には考えられませんでした。

あと、求人倍率でいうと、7年ぐらい前までは0.9倍くらいだったのが、今の有効求人倍率は1.4倍くらいで、1.5倍を超えるときもある。会社に来てくれと言っても、1.5倍では、人間1人しかいないので、0.5の会社は不足しているのです。結構これは、大変な状態だなと。その割には人がいなくて、5年後、それだけ減る。では、どうするかといったら、地元で働きたいという子をどれだけ育てられるかにかかっているだろうと思っています。学校というのは、働くことだけを教えるのではないが、進学した後にでも帰ってきてくれる子供を育てるべきだと思う。働く場を用意するのは僕らだけけれども、その気持ちを育てるのは親だといっても、部活などをやって帰ってきたら、親はほとんど話しをしてないですから、学校場で教育して欲しい。

ハードの話はしなかったのですが、そういったソフト面を大切にしていって、ソフトを最大限に活用できるハードを用意してくれるのであれば、それでいいのではないかというのが私の思っているところです。

<質疑>

○委員

若い人の教育観というものがひしひし伝わってきて、なるほどと思われました。お話の中で、競争原理が働く、あるいは小さな規模の中では人間関係の保持、構築が難しい。ある程度規模が必要だ。したがって、江津高校の場合、人数を増やす、どう増やすのかというご指摘がありましたが、江津高校の生徒数を増やすためには、今おっしゃったような教育の中身、教育の仕組みを新しい形に変えていくということで魅力を生み出すということもあるのでしょうか、もっとほかの人数を増やすためのお考えお持ちでしょうか。

○砂田氏

よそに出ている子供を出て行かさないというのが一番いいので、よそに出ている子どもにとって、うちがいいのではないかというものを用意するのが簡単です。

その次に、それでも足りなければ、よそから連れてくるしかない。岩本悠さんがおられ

ますが、2008年に、講演を聞きました。人をつれてくるというのを、当時、海士はやっていましたが、人をつれてくるのは重要だろうなど。そのためには、きょう、寮の話が出ていましたが、寮はとっても大事だろうと思っています。水球の話も、市長のお話の中にありましたが、試合に出られない子がこっちに来るというのがある。私の妻が今、LINEでとある歌手のファンになっていて、見知らぬ同士でLINEをやり合っているのですが、その子が智翠館に来るから、どこかホテルがないかと相談があった。やはり、ラグビーで、花園に行くために来る、そういう意味で水球というのはおいしい。20、30人を増やすことは多分できるだろうと思っています。そこで、何人増やしたいのかという目標をまず決めないことには、その手法は出ないのではないかと考えています。20人、30人は部活1個でも僕はできると思う。

何かおもしろいことができたと言われていたのですが、それも、多分簡単で、学園祭の運営に予算を全部つぎ込み、子供たちが全部自分たちでできるという学校とかだったら、なかなかおもしろそうだし、それを中学生が見に行くと楽しいと思えば、あれやりたいと言ってくれるかもしれない。そういったことでも教育というのはできるのだろうと思う。それに、プラスアルファ結果がないとだめで、進学のところは進学のゴールの道筋をきちんと数値で出してくれないと。親がなぜここに行きたいのかと言ったときに、1回フェスするからやってみたいでは、説得できないと思うので、そこは勉強か仕事か、どちらかの答えを用意して欲しい。この3つかと思います。

○委員

もう一つ、普通科高校の魅力というのが、最終的には進学実績というか、そこを見るのだとおっしゃいましたが、それ以外に、普通科高校を評価する軸というのは、部活とか、学園祭の特色とか、何かほかにこんな軸があったらいいなというものをお持ちでしょうか。

○砂田氏

これは、本当に難しい。最初のほうに言ったモラトリアムにはちょうどいいのですよ、普通科って。何にも決まってないので、どこでも行けるニュートラルなところに行こうという子供には普通科はとってもいい。目的が決まっている人間には、普通科は選びづらいと思っています。大学をどうするかという、どういう方向に進もうか迷っている人間をとりあえず入れるにはちょうどいいと思っています。あとは、工業系でできないことと、逆に普通科でできることは、わからない。先生方の力というものがあると思うので。

普通科のほうが人数が多いのであれば、先生の数も多いであろうと思う。優秀な先生も

比率的に多いのであれば、そういった優秀な先生が毎年来るようなルーチンワークをつくってくれるのかという点も気にしています。私たちも単年度性の組織なので、去年まで熱心な委員長がやっていたのに、翌年になったら、もうその委員会はありませんでは、おまえ何だったのと言われる。今、3年とか5年ぐらいの長いスパンで面倒を見ようというような計画をしています。学校も、行政もそうですが、担当者が変わったら一気にレベルが変わる、思いが変わるとというのが、問題だと思っているので、公立は、人が変わるのが強みということもあるのだが、人が変わることによる弱みをどれだけなくせるのかということをやってもらえるのであれば、おもしろい。それは、特に人数が多く、先生が多い公立の普通科であれば、その可能性を高められるのではないかと思います。

○委員

P T A会長をされているということで、まずその点から1点。いろいろな意見があって、恐らくJ Cの中でもいろいろな意見が出ると思うのですが、それを市P連や各学校で意見交換や情報共有ができていくのかというのが、まず聞きたい。

高校へ進学する際に、子供の意見が一番大事なのですが、親として、経済的な状況や自分の人生経験からいろいろ助言、アドバイスをします。そうしたときに、江津高校、江津工業の魅力が、親に対して発信されているかということをお伺いしたい。もし発信されていないのであれば、そういう専門でもありますので、どうすればいいのかお聞きしたい。

○砂田氏

まず、J Cの中で共有できているかという話ですが、自分の子供と同じ世代の子どもを持つものがあるので、どう勉強しているとか、進路のことは共有しています。ただ、その中で、江津高校は、今、どうだよ、工業高校は、今、どうだよという情報は、子供が小学校以下の方が多いのでわかっていない。伝わる機会は正直ないので、むしろ情報をいただけるような仕組みが欲しいです。私の昔の従業員にも、こっちの学校ではちょっとレベルがと言って、松江に引っ越して退職した者がいた。もう少し早い段階から、情報があれば、可能性は見えるかと思う。

小学校のP T Aでといっても、あまり保護者の顔がわからないのです。顔は見たことがあるけれど名前もわからない。親が集団で一緒になることがなくて、よく会う人とはいつも会うのですが。だから、そうでない人たちとは会えない。多分、私たちは、こういったところに出るから、学校の現状などを知る機会がたくさんあり、理解できていると思うが、出てきてない親は、自分が子供のころの記憶か、もしくは今入っている方のうわさ話でし

か判断しないので、毎年正しい情報を出してもらえる機会は、ぜひつくってほしい。企業とか大学でも、自分のところに入れさせるための努力は絶対にしているので、それを学校でもしてもらおうとうれしい。

あと公立を、親から見たとき、一番いいのはお金が助かること。これから所得が多分落ちていく。今、年金をもらい始められた方々は、かなり厳しい方が多くて、前までのように、孫のために300万円だせるというじいちゃん、ばあちゃんも、恐らく減ってくると思う。そうなったときに、この町の間が、年収219万円ぐらいの平均所得で、果たして大学に行けるのか。私立に行くお金がないときに、公立は必ず受け皿になります。問題は、お金がないとなかなか難しいことが部活にしても何にしても出てくるので、その財源をどう確保するか。島根県がこの間やりましたが、資格を取ったら奨学金が免除されるとか新聞に出ていたと思います。ああいったものを、地域の学校でもやっているとおもしろい。きょう、ある民間企業へ行って、自分のところを鎖国して人を出さないようにしようと言われたので、自分で基金をつくって、奨学金を貸し付けて、借金という首輪で外に出させないというやり方もありますねみたいな話、笑い話でしてました。それは悪い言い方ですが、言い方をかえれば、人材や、お金を、住民で確保して、残すというやり方も、昔の考え方ですがあると思います。

4 島根県・江津市産業人材育成コーディネーター 横田学氏

横田です。保守的に淡々と整理をしながらお話をさせていただこうと思います。私としては、3つの視点で私の考え方を述べていこうと思います。

私の会社生活で37年間というキャリアからの視点が1つ。2点目は、産業人材育成コーディネーターとしての視点。そして、最後に、原点回帰ということ、基本に戻ろう、創業の理念は何だろうかという視点。この3つについて私の思いを少し語らせていただけたらと思います。

まず1点目の、キャリアの視点。私は工業高校を卒業をして、東京にある目的で出たのですが、残念ながらその目的を途中で断念して、Uターンし帰ってきました。その当時、ほとんどの工業高校の生徒は、皆、県外に出ていたわけです。だから、地域を支える人材というのはほとんどいなかったのです。それを、ある企業が、Uターンを促進しようということで、各県に1社ずつ会社をつくって、江津にもその会社が進出してきました。

その中に工業高校の生徒がかなり採用されておりまして、私もその一人だったのですが、

1月に20名ぐらい採用しまして、本社に行って研修をしました。4月から100名体制で操業を始めると、たった3カ月です。そういう中で仕事の研修を終えて、4月から操業を交代制で導入をしてきたということです。この立ち上げには本社からの指導もありましたが、半年後には、もう支援体制がなくてもやれるようになっていたということです。このことは、その当時、普通だと思っていたのですよね。しかし、何年か経過をして、私は海外の仕事を担当するようになりました。最初は国内でマネジメントをするということで海外の問題をサポートしてきたわけですが、結果的に、支援だけで解決になっていないのです。見える問題をたたいてみると、本質は何だったのかということに全然気がついてなかったのです。それで、海外支援をしている中で、中国の会社の社長をやれということで中国に赴任をしました。その会社は、創業以来7年間ずっと赤字を続けて苦勞していました。北京にありましたが、人件費が上がってきておりまして、そのコスト対策で、農村から農民工という格好で契約社員を多く引っ張ってきて、会社の生産体制を拡充していたわけです。

残念ながら、私が行って分析すると、経営のロスがものすごく大きい。人件費は確かに少し下がっているが、経営のロスがものすごく大きいということに気がついたわけですね。日本の創業時代の研修について、3カ月で研修をしていたと先ほど言いました。中国で立ち上げをするときには約1年間、50人から100人、日本に連れてきて徹底的に研修をしたのです。そういう人材が中国での立ち上げをしたのですが、残念ながら、うまく機能しない。品質だとか設備トラブルだとか、納期だとか、常に問題を起こしている。それを日本から人を派遣して、解決をするというようなことの繰り返しをしていたわけですね。何故かなと真剣に考えると、やはり人の質なのですよね。やはりものづくりの仕事に必要な基礎スキルといいますか、そういうものをどのように育てていくか、つくっていくか。このことが経営の大きなポイントになっているということに、中国で仕事しながら感じたということです。日本では普通だと思っていたことが、海外行くとそうではないということがあります。

商品開発だとかマーケティングだとか設備投資だとか、そういうものは経営の極めて重要な柱であるという認識をしてマネジメントしていたわけですが、実際に国内や海外でいろんなことを体験すると、人材が会社経営に大きな影響を与えているということに、極めて遅くはなったのですが、気がついたわけですね。日本は工業高校の卒業生が会社に入って、工場に入って、現場で頑張ってその職場を支えている。これ普通だったわけですね。しかし、海外行くとそうではない。ですから、そういう面では、日本では当然だが、グロ

ーバルではそうではない。グローバルが普通なのだと、日本はちょっとイレギュラーなの
だという一つの考え方もそこに成り立ってきたわけです。

昭和の時代は、それぞれの会社の職場で工業高校の卒業生が現場をきちっと支えていた
わけですが、ご承知のように平成になって、生産拠点のグローバル化が進んで、海外にも
のづくりがシフトした。そして、日本のものづくりに魅力がなくなると同時に、少子化の
問題だけではなくて、工業高校を目指す生徒がぐっと減ってきたということだろうと思う
のですね。それにつれて、日本経済もものづくりからサービス産業にシフトをするという
ようなことが加速したわけです。しかし今、日本のものづくり力が再評価されていますか
ら、それぞれの企業は、もう一度日本でもものをつくっていかうというかじ取りに変わっ
てきております。

変わってきたのだが、ものづくりを魅力として考える人材がもういないのですよ、今、
残念ながら。これは、ものすごく、大変な状況にあらうかと思うのです。一般的なこの地
域の中小企業というのは、人材確保が非常に難しくなっている。そして、お金とかパ
ワーをかけてやっているのだが、将来が見えてこない。人材という面が大きな課題になっ
ているというのが、今の問題ではなかろうかと思うのです。

そして、2点目。私は産業人材育成コーディネーターを江津市とか県から委託を受けて
やっております。石見地域の企業だとか学校だとか、そういうところといろいろと連携を
しながらいろいろな課題を見てきているわけですが、特に江津工業高校の県内就職率が2
0%、30%を切っていたと思うのですね。しかし、現在は、学校の努力だとか行政の努力
によって、50%を超えるところまで改善をしてきているのです。しかし、子供は減ってい
ますから、そういう面では人数としては増えていないということになります。高校の出
口論議よりも、残念ながらものづくりに興味を持つ子がもういないのですよ。そういう面
では、小学校、中学校、高校に行っても、地元の魅力と働く企業を知らないというこの現
状、これは古くて新しい問題です。ずっと前から言われているのだが、地元のことを知ら
ない。今もそれは問題解決されていなくて、それが大きな課題として残っているというこ
とだろうと思うのですね。小・中学校でのふるさとの魅力と働きをしっかりと教えていく、
ふるさとに興味を持ってくれるようなこと、それはどういうことかといったら、知らない
こととか教えないことをなくす環境を整えていくことが重要になってくるわけですね。そ
ういう面で、今、江津市の小・中の、特に中学校の先生方は、とにかく地元の企業を知っ
てもらおうということで、非常に前向きに、今、取り組んでもらっていますが、これをど

うこれからしっかりやっていくかということだろうと思いますね。

グローバル化がさらに加速していく中で、日本で、地方で、中小企業が生き残って雇用を創出していくには、企業を支える産業人材、これが極めて重要で必要不可欠だろうということなのですね。やっぱり地方が生き残るには、雇用の場がきちっとないといけないことが、いろいろな問題があるとしても、やはり働く場ということが極めて重要だろうと思います。特に石見地域は、雇用の場も限られているわけですね。そして、若者の流出に今も歯止めが効いていない。こういうことが極めて大きな問題だろうと思うのですね。したがって、生き残りをかけた魅力ある企業の体質を改革していく、先頭に立って進めていく人材を育てる工業高校、普通高校でもいいと思いますが、さらに充実をしていくと、地域の活性化にリーダーシップを発揮してくれる人をつくるということが必要だと思います。もう1点は、小・中・高生にもものづくりに興味を持つような仕掛け、知る、教える、そういう取り組みが極めて今、重要ではないかと、知らしめてない、ここに大きな問題があるように思います。

そして、コーディネーターのもう1つの視点として、今ある江津の宝物、石見の宝物は、工業高校とポリテクカレッジなのですよね。これをどのように進化をさせて、ほかの地域にない産業人材育成というものをつくっていかなくてはいけない、差別化をしなくてはいけないということだろうと思うのですね。地方が生き残っていくには、企業が元気で雇用の場が確保され、拡大していくことが最も重要である、これはもうご承知だろうと思うのです。そのために、ものづくり技術、技能を備えた企業を支える人材を育てる機能、機関をさらなる充実をしていかなくてはいけない。ほかの地域と差別化した人材育成拠点を確立していかなければならない、工業とポリテクですね。この事業の一元化というのは早くやるべきだ、林田さんがおっしゃったように、西の高専というような格好で企業を支える、そして、魅力的な学校というところにシフトしなければいけないのではないかと思います。

最後に、困ったときには原点回帰ということで、基本に戻ろうと。工業高校ができた、学校ができたときには、その地域のために、子供たちの将来のためにという基本があったのではないかと。それを、数値から見てこうなるからああだと。それは確かに誰が見てもわかります。しかし、それを変えていく思い切った施策を出していかないと、この地方というのは生き残っていけないというように思うわけですね。

ものづくり構造がさらに変化します。人から高精度設備に、ロボット化。大きく変化して、ものづくりの技術、技能がさらに高く、強く、今、求められていくと思うのですよね。

日本の子供たちは、親も含めて、ものづくりに興味を持たなくなってきております。特に地方はその影響が極めて極端に出ているということだろうと思うのですね。小・中学校教育においても、図工だとか美術だとか技術家庭、しっかりやってきましたが、そういうものづくりの基本となる授業が、大幅に今、減ってきているということがある。そして、教える先生も少なくなってきている。だから、このような状況で、工業高校はどうあるべきだとか、地域の産業をどうするのかということ論議したって、極めて難しい状況になる。だから、しっかり論議をしていって、高校の在り方というのを見ていかないといけないのではないかと思います。

そういう面で、石見地域の小・中・高・大を中心とした産学官民の協力、連携で、地域を挙げてものづくりに興味を持つ子供を育てていく。そして、クオリティーの高い産業人材を輩出する地域として全国に発信をしていく。ただ地元の子供たちではなく、その魅力を発信することによって、この石見地域の産業界の衰退を何とかとどめていく。産業界が衰退していけば、町も消えていきますから、そういう意味では必死になってやっていかなくてはならない。

最後に、市長もおっしゃっていましたが、地方創生だとか、地方の生き残り、石見地域の産業界が元気に成長し続けていかなくてはならない。それを可能にしていく人材育成システムですね、これが工業高校とポリテクカレッジの協力、連携、強化だというように思うわけであります。それと、もう一つは、地域を挙げて、将来を支える子供たちがものづくりに対して興味を持つような取り組みをやっていく。その中で、高校の在り方というのは、小・中もあわせてどうあるべきかということをしっかり論議をしてもらい、方向性を出してもらおうとありがたいと思いますので、よろしく願いいたします。以上です。

<質疑>

○委員

大変力強い、夢のある話だと思って聞きました。工業とポリテクの連携の話、実現できるのではないかと思います。江津高校には、ものづくりという観点も含めて、どういうことを期待しておられますか。

○横田氏

マネジメント力をどう高めるかということですね。いろいろな仕事、職能がありますから、そういう中でちゃんとマネジメント、人をうまく使いながらやっていく。そういう特

徴のある、社会に出て、江津高校の卒業生というのはマネジメント力が非常に高い、そういうところをしっかりと学校で教える。ほかの学校ではできない施策ですね、普通に、大学進学だというのではなくて、江津高校の在学中に、企業における職場体験もさせながら、どうやって会社の中でリーダーとして頑張れるか、そういうような要素、技術をしっかりと勉強させてやるということが、江津高校が今後も生き残っていく、外からも子供たちが集められる一つの要素になるような気がするのですよね。ただ、進学だけを求めていたら、これは浜高に負けます。そうではない、社会に出ていくための力というのは何だろうかということもしっかり見きわめて、その仕組みをつくるということは重要なことだろうと思いますね。

○委員

ものづくりに関してなのですが、私もものづくりに関して、今の若い人たちが随分離れていっていると実感しています。今、おっしゃったものづくりの人材を育てていく、それからマネジメントのところ、これは、現状の中ではなかなかすぐにできることではないし、指導する人たちも失っている。そういう中で、どういうふうに進めていったらいいかというところが次のステップになると思うのですが、どうお考えでしょうか。

○横田氏

先ほど、砂田さんも、林田さんもおっしゃったように、企業がもう学校に入り込まなければいけないのですよ。ものづくりの魅力を子供たちにしっかりと体験させる。そういうことをサポートしてくる企業、そして、ポリテクカレッジもそうですし、江津工業高校の生徒たちも、小学校、中学校の授業として、ものづくりのおもしろさなり体験をどんどん主体的にやっていけるような環境をつくっていくということで、十分できるだろうと思っています。今は、残念ながら、ものづくり体験教室というのが、何時間かのイベントで終わっているのですよ。このおもしろさをしっかりと理解していくところに入ってないので、できたら、学校の授業の中で、技術家庭の授業をポリテクがやったり、工業高校がやったり、林田さんのところがやったりだとか、いろんなメニューをつくってもものづくりのおもしろさ、社会に出ての製造業の楽しさということを教えていくということは、今からでもできると思いますね。

○肥後会長

ある意味では、人材育成というものを全国どこでもなべて同じという形ではなくて、人材育成そのものの特色をこの地域から発信するという方法があるのではないかという、ご

提案であったと理解しております。

いかがでございましょう。なかなか小・中学校の段階からそちらへ向かって偏らせる教育課程というのは、すごく力が要りますよね。その辺を高校からと考えるといいのか、それとも、その手前からと考えるといいのか、その辺難しいですね。

○横田氏

偏らせというのではないのですよ。そういう情報をきっちり提供していくわけですね。それで、選択は子供たちがしていくわけです。今は情報が偏ってしまっている、だから、昔あったような工作だとか図工だとか、そういうことも含めてものづくりの楽しさというのをもう一度、今度は企業も含めてやっていこうではないかということだと思っておりますね。

もう1点。今、砂田さんのところがおもしろいことをやってくれています。工業団地をウォークラリーしようという企画ができています。それで、トップ金属としまね森林発電で40人募集をかけたら、もう子供たちがいっぱいになっている。こういうことがだんだんこの地域ではできるようになっているわけですね。学校関係だけではなく、地域で働いている人が、工業団地に行ってみようと、それをウォークラリーでやってみようとかスタンプラリーだとか、そういうおもしろいことをどんどん企画してくれている。これが石見地域に広がらないといけないような気がします。

○委員

話の中で印象的だったのが、石見を見据えてお話をしておられたことです。私たちも議論の中で、地元といったときの地元が、市の単位なのか、石見という単位なのか、もっとほかの選択肢もあると思うのですが、すごく悩んでいるところがあります。横田さんが石見ということにこだわっているところとか、高校が見るべき視野についてお聞かせ願えたらうれしく思います。

○横田氏

石見地域に工業高校は1つしかないし、商業高校も1つしかないのですよね。ですから、それをどう地域で将来に向けて、武器にしていくかということが僕は大きなテーマだろうと思うのですよ。そういう観点で、江津だけを見ても子供たちが200人、100人、どんどん減っていくわけで、狭義で物事を考えたときには行き詰まってしまうわけですね。ですから、石見地域全体で物事を考えて、戦略を考えていくことをして、もっと行き方、進め方が見えてくるような気がします。浜田にある商業高校も同じことだろうと思うのですよね。浜田の商業高校で物事を考えたときは、それで終わってしまうことだろうと思います。し

かし、石見地域で商業高校の果たす役割というのはどんなものだろうかということ、企業も入れて真剣に考えていくと、見えてくる道があるような気がいたします。そういう面で石見ということで考えました。

教育監あいさつ

本日、大変お忙しい中、山下市長様、お出かけいただきました。また、4名の意見陳述の皆様方も、ご多忙の中、それぞれの思い、それからそれぞれの皆様を取り巻く人脈、背景を踏まえたご意見をいただきまして大変感謝しております。委員の皆様方におかれましては、午前中の浜田市、それから江津市と、丸一日大変お疲れさまでございました。

この会の議事録につきましては、第1回から全て県教育委員会のホームページにて議事録を公開しております。また、さまざまな立場からご意見、ご要望等おありかと思えますけれども、事務局のほうに直接いろいろなご意見をいただく機会が持てたらと思っておりますので、よろしく願いいたします。

いずれにしましても、魅力ある島根県の新しい高校教育の在り方について、また委員の皆様方におかれましては、引き続き議論を深めていただきますようお願い申し上げます。

本日は、大変長い時間でしたが、ありがとうございました。